
かつ！～初期装備で魔王（ラスボス）を倒してしまったレベル1の就活中残念系勇者ですが何

左リュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しゅうかつ！〜初期装備で魔王を倒してしまったレベル1の就活中残念系勇者ですが何か？〜

【Nコード】

N1221X

【作者名】

左リユウ

【あらすじ】

ゲームの世界に転生した勇者は、魔王を倒し、元の世界に戻る事も無くただただ日々、レベル、能力値MAXの状態で雑魚モンスターやら魔王やら村長やらをオーバーキルする事を繰り返していた。そしてそんなある日神様から「ちょwお前やりすぎww」的な事を言われて、また別のゲームの世界に転生。レベル、体力、攻撃力、防御力、すばやさ、オールーの残念な状態で。しかし、彼にはまだ組み合わせればチートになりうる『スキル』が残っていた。そして

転生した世界でいきなり初期装備の状態で魔王（ラスボス）を撃破してしまう。魔王を倒してしまい、異世界で目的を失くしてしまった残念な勇者。そして勇者はこの世界で平穩に過ごす為に、村の少年と共に神殿（ハローワーク）に向けて旅を行う事となる。勇者の安定した職を求めた冒険が始まった！ 異世界転生、RPG就活ファンタジーラブコメ！！ 主人公最強、チート、ハーレム要素有りなので、苦手な人はご注意ください。現在、イラスト、レビュー等募集中！

お知らせ【レビュー・イラスト、募集中】

現在、レビュー、イラストを描いてくださる方を募集中です。

しゅうかつ！ のレビューをしてやってもいいぜ！ と言う方。

しゅうかつ！ のイラストを書いてあげてもいいんだからね！？
と言う方。

が、もしもいらっしやるならば、連絡をお願いします。

あと、しゅうかつ！ には全く関係がありませんが短編を書いて
みました。

『超能力を喰らうモノ』という短編です。

暇な時に見てやってください。

それでは、残念な勇者達の残念な会話と物語をお楽しみください。

左リユウ

第一話 魔王倒しちゃった

目の前が暗い。これは恐らく、目を閉じているからだろう。俺はそつ、と目を開ける。

目を開けると、目の前に広がるのはただっぴろい大草原。そよそよと心地よい風が頬をなでる。俺は周囲を見渡した。すると、今俺の居る位置から少しした所に村があった。

そして俺は自分の身なりを確認した。安っぽい布で出来た動きやすい服。そして腰には剣。左手には皮で出来た盾。

「……何もこんな所に飛ばさなかったっていいんじゃないのか？」

と、一人グチをこぼす。

まあぶっちゃけると、俺は転生した。しかも、二度目だ。

元々は俺ただの普通の、平凡でイケメン（ごめん。見栄を張りすぎた）な、ゲーム好きの高校生だった。そしてある日、いつものようにゲームに一日の大半をニートのように使い込んでいたある日。突如ゲームの世界に転生させられた。当初は俺もいきなりの展開についていけなかったのだが、なにやら俺にはチート能力が備わっていたようで、あつという間に魔王^{ラスボス}を倒し、ゲームエンド、となった。

しかし、それでも元の世界に戻る、というわけでも無かった。俺をゲームの世界に転生させた神様いわく、「どうせ戻ってもニート予備軍のような生活だし、別に戻らなくてもよくね？ 面倒だしらしい。」

最後の方は明らかに本音だろう。しかし、言われてみればそうだった。別に現実に戻ってまた暇な生活を送らずとも、このゲームの

世界で最強の勇者として生きていく方がよっぽどいい。

そして、ゲームクリア後のレベル、体力、攻撃力、防御力、すばやさ、等の全ての能力値MAXの状態で、世界中で暴れまわって雑魚モンスター相手にオーバークルしたり、よみがえった魔王に向かってオーバークルしたり、暇つぶしに村長に向かってオーバークルしたりしていると、またまたある日神様が俺の前に現れた。そして、こう言った。

「ちょwお前やりすぎwww」

うん。俺も世界中の全種類のモンスターを千回ぐらい倒した後に気がついた。

まあ、町の人はみんな大喜びだからよしとしたが。そして、神様が「お前調子乗りすぎ。今度は別のゲームの世界で勇者として頑張れや。あつ。そうそう。レベルと能力値は全部一な。ざまあwww」

そんな理由があり、俺はこうして別世界にまた転生する事となった。

今確認してみたが、確かに俺のレベル、体力、攻撃力、防御力、すばやさの能力値が全て一となっている。しかし、神様が配慮してくれたのか、『スキル』の方はどうやら全て引き継ぎしたようだ。

「さて、そろそろ村に行くか」

俺は、村に向かって歩き出した。

村に着くと、何やら村の様子が騒がしかった。俺は村の裏門から入ったので、騒ぎの中心。村の表門の方へと向かう。

因みにこの転生させられた世界は俺が前回まで居たゲームの世界とは違うようだ。(一応は、ゲームの世界のようだが)少なくともこの村には見覚えが無い。村と言えば、うっかりオーバーキルしてしまった村長を思い出す。今度、もしも村長の生まれ変わりとかにあつたらちゃんと謝罪しよう。

ざわざわと、門の所に人が集まっていた。俺は近くの人に声をかける。

「あの、この騒ぎは？」

「ああ。今日は勇者を目指す者達が旅立つ日なんだけどね、」

勇者を目指す者達って、そんな職業的な。

「村を出発した所でいきなり魔王ラスボスに襲われたらしいんだ」

「うわあ……………」

ぶっっちゃけ引いた。

レベル一の勇者に向かってラスボスが登場とは。

大人げ無さ過ぎる。

俺は興味本位で門の近くへと寄ってみた。そこには、力果てて倒

れている新米勇者と、魔王と思わせる怪物がドヤ顔で空中に浮いていた。

魔王となんとなく判断したのは、角が生えているのと、全身が真っ黒になっていて、おでこに「魔王」と書いていたからだ。これこそ、『THE・MAOU』というような姿だ。

「卑怯だぞ！ 初期レベルから一レベルも上げていないのにいきなり襲うなんて！」

村人Aが叫ぶ。

「フッフッフ。もうのんきにレベルをゆっくりと上げる事の出来る時代は終わったのだ。これからはレベルが上がる前に秒殺して、高レベル状態でのラスボス戦を食い止めるのだ！」

「それに初期レベルのパーティに対して『全体攻撃』とか大人げないぞ！」

と村人Bが叫ぶ。

「ふっ！ 笑止！ こっちだってなあ、色々大変なんだよ！ 友達や親戚の魔王からも苦情が来てるんだぞ！ 勇者達は自分達だけ好き勝手にレベル上げて俺達に万全の状態で挑んでくるし、一人倒しても他の奴が復活させるし、なんとか全滅させても教会だなんだでまたゾンビみたいに生き返ってくるし、倒されたら倒されたらで「レベル上げ」とかなんだ理由をつけて何回もボコボコにしてくるしよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！
もうウンザリなんだよ！ こっちにはレベルなんて無いんだぞ！（泣）」

どうやら魔王にも魔王の苦勞があつたようだ。それをあの涙目が証明している。

「くっ。誰か、あの魔王を倒せる者はおらんのか……………」

苦々しく口を開くのは、村長だ。……………って、あの顔は……………

……………!

俺は村長の顔を目を見開いた状態で見ると。

それこそまさに、俺が前の世界でうつかりオーバーキルしてしまったよぼよぼの爺さん、村長だった。間違い無い。顔に「村長」と書いてある。

俺は、ずいつ、と一歩、魔王の前へと進み出た。

今こそ、前の世界での罪を償う時だ。

「ん？ なんだ貴様は」

「勇者だ」

「またか！ ええい、死ねっ！ レベルを上げる暇など与えるものかああああああああああああああああああああ！」

ズオツ！！ と魔王の手から切実な願いと共に衝撃波が発せられる。

「ああっ！ 危ない！ あと魔王も大人げない！」

と、村人が叫ぶ。

しかし、俺はその衝撃波を食らっても、ノーダメージだ。

「何!？」

「驚く魔王。ま、当然だな。」

「貴様、一体どういう事だ!? 能力値は……………」

勇者 レベル：—

体力：—

攻撃力：—

防御力：—

すばやさ：—

「……………残念な能力値だ」

「うるせえっ! ほっとけ! 自前なんだよこれは!」

「ってちよつと待て! なぜ俺の攻撃を防げるっ!? まさか、スキル!? なぜそんなスキルを持っている!? 初期設定のクセに!」

スキル、というのはようするに特殊能力のような物だ。

例えば、今俺が発動した『精霊の守り』は1%〜5%の確率でダメージを0にする。そして、『戦いの女神』は戦闘中のみ幸運が訪れる。確率を持つスキルも、100%成功する、だ。

そして、さつき魔王の攻撃を防げたのも、『戦いの女神』で100%

発動する『精霊の守り』の効力でダメージを0にしたからだ。

「しかし！ こちらにはまだ魔王おなじみスキル、『二回行動』が

」

こっちの反撃だ。ここでスキル、『先制』が発動する。

『先制』は、文字通り、すばやさに関係なく先制攻撃を行えるスキルだ。

「フツ！ しかし、攻撃力一など、蚊ほども効かんわっ！」

「はいはい。ワロスワロスwww」

直後、ボツ！！ と、俺の手の平から発せられた衝撃波により、跡形も無く、魔王が粉碎された。もう塵一つ残っていない。

今発動したスキル『一撃必殺』は、1%〜3%の確率で敵を一撃で倒す事の出来るスキルだ。これならば、攻撃力がいくら低くても関係無い。さらに『戦いの女神』でこのスキルは100%成功する。

「……………いやしかし、こんなにも手ごたえが無いとは思わなかった。

しーん、と静まり返る村人達。

「ま、」

俺は冷や汗ダラダラでにこやかに呟く。

「魔王倒しちゃった」

考えてみれば俺は、勇者達の目的を初期装備で倒してしまったのだ。

第二話 村長にあげちゃいます

魔王を倒した後、俺は村のみんなの歓迎を受けた。そして、村長ラスボスの家で宴会が行われた。そして、次の日。村長の家の食卓には、俺と、村長と、その孫のボレアスがついた。

ボレアスはぱっと見はとても大人しい少年だった。年は俺と同じぐらいだろうか。眼鏡をかけており、読書が好きなようだ。

「先日は『大人げない魔王』を倒してくださってありがとうございます
ました」

「いえいえ。それほどの事でも」

まあ、前の世界で村長にそっくりの人をオーバーキルしていた時の償いとは言えない。つーかあの魔王って『大人げない魔王』という名前になったのか。少しアイツに同情する。(木っ端微塵にしといてあれだが)

「これからはどうするのですか？」

「そうですね……………」

ぶっちゃけいきなり魔王を倒してしまった今、この世界に明確な目的は無い。やる事といえ、この世界で平穩に過ごすだけだ。

「……………俺でも働けそうな職でも探そうと思います」

「ほう。この村には神殿ハローワークが無いですからなあ。他の町に行かなければ難しいですかな」

神殿つて、ハローワークなのかよ。この世界では。

「だったら、その町まで行ってきます」

「出発は何時になさるのですか？」

「準備が出来次第、という所でしょうか」

動くなら早い方がいいだろう。

「そうですか……その旅に、誰かお供をつけてもよろしいですか？」

「と、いいいますと？」

「実はこのボレアスも、就活をしていますがな。一緒に神殿ハローワークに連れて行ってくれないかな？ 先日の魔王ラスボスに襲撃されて、行きそこなつたのです」

「俺は別にかまいませんが」

「よろしく」

ボレアスは丁寧にお辞儀をした。まあ、旅は多少は騒がしい方がいいだろう。

そして、次の日に出発が決定した。俺とボレアスは表門に集まり、そして村人達から激励をとばされていた。

「頑張れよ！ 都会の荒波に負けるなよ！」

「今の時代は就職氷河期だけど、頑張って就活しろよ！」

「希望した会社は何十社も落ちると思え！ それだけは覚悟しとけよ！」

うわ。なんだかリアルな激励だ。

「ボレアスも頑張れよ！」

「あ、ああ。頑張ってくるよ」

今更だが、就活する勇者とこのもどつかという気がする。いや、魔王を倒してしまったから仕方が無いけど。
ラスボス

「おつ。そういえば勇者さん。魔王を倒して、能力の方はどれくらい向上したんだい？」

村人Dの質問で、ようやく思い出した。そういえば、まだ経験値を貰ってなかった。

勇者 レベル：一

体力：一

攻撃力：一

防御力：一

すばやさ：一

MP：一

元々魔法はあまり使わなかったので今更だが、どうやらMPです
らーのようだ。つーかMPがーだけあっても意味なくね？

「相変わらず残念な能力値だなあ」

どっ。と笑いが巻き起こる。

フツ。今の内に笑うならば笑うがいい！ 俺は魔王^{ラスボス}を倒して経験
値をどれだけ得たと思っている！？

取得経験値：千百二十七万

クツクツクツ！ これで残念な能力値ともおさらばだ！
俺は経験値の取得を行った。

．．．．．しかし。

勇者 レベル：一

体力：一

攻撃力：一

防御力：一

すばやさ：一

MP：一

取得経験値：千百二十七万

「……………へっ？」

俺の能力値が全く変動せず、ポカーンとする村人一同+俺&ボレ
アス。経験値の習得が行われていない。

……………どうやら、俺はレベルと能力値が全て一どころか、
経験値の習得すら行えないようだ。つまり、俺は永遠に能力値オー
ル一、というわけだ。

「ど、どんまい」

村人Eが慰めてくれる。

同情よりも経験値をくれよ。マジで。

しかし、この有り余った経験値をどうしよう。……………そ
うだ。

「じゃあこの経験値を……………村長にあげちゃいます」

「……………村長に？」

そして、俺は取得した経験値を村長に惜しみなく譲渡した。

「ほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
ああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ！！」

ピコーン、ピコーン、ピコーン、と村長のレベルが急速に上がって行く。同時に、村長の筋肉がモリモリと膨れ上がり、上半身の衣服がビリビリと破れてゆく。

「……………そ、村長 ……!!」「……………」

そして、村長のレベルアップが終了した。

勇者 レベル：—

体力：—

攻撃力：—

防御力：—

すばやさ：—

MP：—

村長 レベル：六十七

体力：三百四十六

攻撃力：二百六十五

防御力：百八十七

すばやさ：百七十四

MP：百七十三

「……………そ、村長 ……!?!」「……………」

もはや村長かどうかを確認する為か、声が疑問系と化している。

「お、おじい、ちゃん……?」

ボレアスがまじまじと自分のおじいさんの姿を見つめている。あのヨボヨボとした村長が、ムキムキのマッチョマンと化している。

「……うむ。なんだか生まれ変わった気分じゃわい」

「最早レベルが生まれ変わっているよっ!!」

そして、経験値の譲渡を終えた俺とボレアスは、ハローワーク神殿のある町に向かって歩き始めた。

こうして、俺達の職を求めた冒険が始まったのだった!!

勇者 レベル：一

体力：一

攻撃力：一

防御力：一

すばやさ：一

MP：一

ボレアス レベル：一

体力：十

攻撃力：三

防御力：四

すばやさ：四

MP：四

明らかに俺のステータスの方が残念すぎる．．．．．同じレベルなのに。

因みに、村の中のどの人間よりも強くなった村長が『村の最終兵器』として、盗賊団を殲滅させたのは、また別の話である。

第三話 『こんぼう』をください

ハロワーク
神殿のある町の名前は、『フロイス』という町らしい。歩けば三日で着くそうだ。

「三日もかかるのか」

まだ転生する前。MPがMAX状態で魔法でガンガン色んな所を飛びまわってた頃が懐かしい。今はせいぜいスキルしか使えないし。

「そうなんだよね。それにそれまでにモンスターが襲ってこないとは限らないし。そうだ。装備を確認しない？」

最初の方は敬語だったボレアスも、なじんできたのかそれも無くなった。まあ、こっちとしても敬語のままだと距離が離れているようで嫌だし、仲良くなれたようで嬉しい。

「そうだな。確認しとくか」

俺の場合はスキルがあるから序盤のモンスターごときどうという事も無い。心配なのはむしろボレアスの方だ。

装備

勇者 たびびとの服

たびびとのズボン

たびびとの靴

普通の剣
皮の盾

と、ここまでが俺の装備だ。
さて、ボレアスの装備は……………

装備

ボレアス たびびとの服

皮のズボン

皮の靴

普通の本 ここで、重要

「ちょっと待て!!」

「何か問題でも?」

「大有りだろ!!」

上の三つはいい。普通だ。

けどなんだ! 『普通の本』って!

つか『本』って武器なのか!?

武器だとしてもそれでいいのか!?

最早ただの本じゃねーか!!

「武器が明らかに可笑しいだろ！」

「本って案外痛いんだよ。角で叩くと」

「解ってるけど！ 痛いのは解ってるけど！」

「……ちょっと目眩がしてきた。

しかもボレアスは盾すら持っていない。

コイツは自分の命を守る気があるのか無いのか。

「全く。装備は基本だぜ！？ しっかりとした装備をちゃんと用意しておけよ！」

と、俺がめずらしく説教を始める。（ゲーム世界に転生する前は説教される側だった）が、その時。

ペリペリ………

「「？」」

俺の『皮の盾』から不吉な音が聞こえる。直後、ペろん、とあっけない音と共に、『皮の盾』の皮がはがれ、下からただの木の板が現れた。

「「………」」

何かを確かめるように、俺は『普通の剣』を手に取る。よく触って確かめると、刀身がプラスチックで出来ていて、上に引っ張るとスポツ、と取れた。そしてプラスチックのカバーの下から木刀が顔を覗かせていた。

「.....」

装備

勇者

残念な服

残念なズボン

残念な靴

残念な剣

残念な盾

気がつくとも装備が全て『残念な』に変わっている。

「.....なんか、ごめん」

「.....いや、こっちこそ」

残念な装備を装備しながら、俺達は歩を進めた。

それでも、なんとか旅は一日続いた。途中でモンスターに会わなかったというわけでも無いが、俺のスキルで一掃して行ったので問題無し。

しかしその経験値を俺は得られない為、ボレアスに譲渡する事となる。そしてボレアスのレベルはメキメキと上昇していった。

勇者 レベル：一

体力：一

攻撃力：一

防御力：一

すばやさ：一

MP：一

ボレアス レベル：七

体力：二十五

攻撃力：十三

防御力：十

すばやさ：十

MP：十

最早俺の七倍のレベルへと到達している。

正直凹んでいないといえは嘘になる。いや、だって俺がワロスビーム（俺命名）で敵を一掃しているのに、その経験値は全てボレアスに行くのだから。

．．．．．あの神。^{クンジュニ}次にあつたら覚えてるよっ！

そして、旅は二日目へと突入した。

俺もボレアスも早く目が覚めてしまった為、出発は早めとなった。

そして歩き続け、昼前に道端にある一つの店のような小屋が見えた。

「行ってみようか」

「そうだな」

その小屋の前に行ってみると、そこはどうかやら出張の武器屋だった。店の主人に話を聞いてみた所、ちょうどこの先からモンスタの強さが上がるらしく、装備を整えたい旅人達にとっては重宝されているらしい。

「俺達もここで装備を整えよう」

「得策だね。特に君は装備が残念だし」

「やめてくれ。俺の心の傷を広げないでくれ」

「ついさつき店の主人からも「残念な装備だな………」と言われた所だ。」

「店にあるのは『銅の剣』と『こんぼう』と………」

「案外普通の装備だな。」

「『銅の本』」

「ちょっと待て!！」

「おかしい。」

「あきらかにおかしい。」

もしかして本は以外と武器として流行っているのか!?

「『銅の本』を下さい」

「買うのかよ!?!」

「一万Gとなります」

「しかも高いッ!?!」

まあ、ここまでで虐殺しまくったモンスター達のおかげで、金はそれなりにある。

「俺が買えるのは『銅の剣』と『こんぼう』か」

「どっちにする? 一応攻撃力は『銅の剣』の方が高いけど」

うーん……………どうしようか。

一応俺にはスキル、『二刀流』があるので武器は二つ装備出来る。残念な剣を一刻も早く手放したいのだが、神のせいかな否か呪いの装備のごとく装備を外せない。しかも攻撃力が一しかないのだから残念すぎる。

そして俺は迷った末に、

「『こんぼう』をください」

「タダでいいよ。なんか、残念な装備で気の毒だからね……………」

「は……………ありがとうございます……………」

人から同情を貰うぐらい残念なのだから泣けてくる。

「どつして『こんぼう』にしたの？」

店を出た後、ボレアスが当然の疑問をなげつけた。

「いや、斬るより殴る方がなぶり殺しに出来ると思って。だから俺の中では『なぶり殺し』「こんぼう」銅の剣』なんだよ」

「………趣味わる」

と、ボレアスがぼやいた瞬間だった。

草むらから突如、モンスターが現れた。

「身包みを全て置いていけっ！！ そうすれば命だけは助けてやるぞ！？」

偉そうにぎゃーぎゃー叫ぶこの猿は、『ヤマザル』。知能がほどほどに高く、人と会話を行う事が出来る。

「丁度いい。『こんぼう』の試運転だ！」

俺はスキル『先制』を発動。先制攻撃をしかける。

「『こんぼう』！？ フハハハ！ ばかめ！ 貴様のレベルで、そんな物が効くと思ってるのか！？」

第四話 ここが神殿（ハローワーク）か

就職都市『フロイス』。

ボレアスによると、この『フロイス』には大規模ハローワーク神殿があるらしい。中でも、この『フロイス』にある神殿は世界でもトップクラスの実績と規模を誇るらしい。

『就職都市』の名は伊達では無い。仕事が見つかるまでは、恐らくこの都市が拠点となるだろう。

とりあえず、俺達は早速、ハローワーク神殿へと直行した。

歩いていると、都市自体はかなり活発に動いているように見える。人の流れも盛んで、にぎやかだ。辺りを見回すと宿もいくつもある。ここは就職都市なので、恐らく仕事が見つかるまで居座る人が多いためだろう。そういう人達に配慮してか、宿の値段も格安だ。

ハローワーク神殿の前にたどり着くと、そこには巨大な文字通りの神殿があった。恐らくハローワーク神殿一つだけでボレアスの居た村ぐらいの広さはあるだろう。

中の移動は大変そうだ。

俺とボレアスはさっそく中に入る。入った途端、職を求めに来た迷える哀れな子羊達でいっぱいだ。（勿論、俺達もその内の一人だ）

「ここがハローワーク神殿か」

勇者がハローワークに行く事なんて正直聞いた事が無い。

「なんだか人が多いな」

「そうだね。でも、ここは世界でもトップクラスのハローワーク神殿だから、色

んな所から人が来るんだと思う」

納得。

確かに、それならばこの人の多さもうなずける。
周囲を探るために耳をすませてみると、

「また落ちたのですか？」

「はい．．．．．やっぱ僕って、死んだ方がいいのかな．．．．．
．．．．．これだけ落ちると．．．．．」

「あきらめないでください。一緒に頑張りましょう」

「でも．．．．．これでもう五十七社目だし．．．．．」

「頑張ってください。あきらめても何も解決しませんよ」

なんて声が聞こえてくる。

「．．．．．凹^くむわあ．．．．．」

「やめてよ。縁起が悪い」

就職試験で勇者が五十社以上も落ちるとか考えたくない。これなら魔王の方が相手的にはどれだけ楽だったか。

そこでふと、ある一つの求人広告に目が止まった。（ハローワーク 神殿の中に
は求人広告が色んな所に貼られており、嫌でも目につく。）

魔王求ム！！

～仕事内容～

- ・魔王の城で偉そうなイスに座って偉そうに座る。
- ・立ち向かってくる勇者を返り討ちにする。(一つの勇者パーティを全滅する事にボーナス十万円)
- ・城の中のモンスターの訓練とモンスターの配置。
- ・城の中の罠の設置。

～報酬～

- ・アルバイト 自給：五百円
- ・正社員 月給：月収百万円

・アルバイト、正社員問わず、魔王をしている間は魔王の城をプレゼント

～注意事項～

・座り仕事ですが、できるだけ魔王のイメージを壊さないようにしましょう。

・『第一形態から第三形態までの変身が出来ない者は不可』 重要！！。

・危険な仕事です。勇者パーティは全滅させてもまたレベルを上げて再チャレンジしてきます。

・倒されても、相手はレベル上げの為に何度もやってきます。

・アルバイト、正社員問わず、一度受けると一ヶ月は辞める事は出来ません。

↳取得していると優遇される資格

・魔王検定一級

・座禅検定一級

・変身検定一級

・『二回行動』検定一級

・モンスター検定一級

魔王をやりたい！ という方はコチラの番号まで

× (世界魔王協会コールセンター)

××

やる気のある方なら初心者でも大歓迎！ スタッフが温かく歓迎いたします！

「.....俺、これやるのかな」

「やめときなつて……」

魔王の正社員ってこんなに儲かるのか。いいな畜生。

「あー、確かに。俺、第三形態までの変身なんてとても出来ないからなあ。俺も『変身検定』取ろうかなあ」

「いや、そういう意味じゃなくて」

結局、未練がましく魔王の求人広告を見ていた俺は順番待ちの席まで連れて行かれた。しばらくすると、俺とボレアスの順番が巡ってきた。

俺は十一番。ボレアスは十二番だ。

「それじゃ、また後で」

「おおー」

カウンターに座ると、目の前にはいかにもベテランと言った風貌の中年のおじさんだった。とても厳しく、厳つい顔をしている。(しかもなんか右頬に傷があるし。本当に公務員か?)

「それでは、履歴書のご提示をお願いします」

俺はいわれるがままにさっき書いた履歴書を出す。履歴書には自分の簡単なステータスを書くだけだった。

勇者 レベル：一

体力：—
攻撃力：—
防御力：—
すばやさ：—
MP：—

装備

残念な服
残念なズボン
残念な靴
残念な剣
残念な盾

「……………ぷっ」

「笑いましたよね？ 絶対に今笑いましたよね？」

「いえwww笑ってませんよwww」

うわー。ムカつくわー。しかも、もう完全に隠す気がねえし。

「それでは少々お待ちくださいwww」

そう言って、おじさんは奥へと消えた。

「おいwww見るよこれwww」

「うわっwwwレベルーとかwww」

「しかもなんだこの残念な装備 W W W ワロタ W W W」

「泣いてないからな？ これはあれだ。今朝飲んだ『就職ジューズ（グレープ味）』が目から溢れてきたんだ。」

「というか人の履歴書をネタにするとかどういう事だあああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
の公開処刑じゃねか！！」

「しかも名前が『勇者』とか W W W」

「野菜ジューズ吹くわ W W W」

「やめて！ 俺のライフはもう0よ！（泣）」

「しかも名前はトラウマなんだよ！」

「おまたせしました（笑）」

「……………（泣）」

「いや、「W」が「（笑）」になっただけでもよしとしよう。」

「えーっと、勇者（笑）様のご就職先なのですが……………」
「ぶっ殺すぞクソじじい。」

「……………どうだった？」

ハローワーク

神殿前でボレアスと落ち合った。ボレアスの落胆したような表情を見ると、どうやらあまり良い返事をもらえなかったらしい。

しかし、恐らく、俺の方が被害は重大だろう。

なぜなら、

「……レベルと能力値がオール一じゃあ就職先なんてほとんどねえぞだって」

「(、(、(、(」

そんな表情はやめてくれ。

余計に落ち込むから。

「……就職への道のりはまだまだ程遠い、という事だろうか。」

第五話 やってやるよ。クレンジイ（前書き）

今回の話は雰囲気一変！？ 就職への第一歩を踏み出します（笑）

第五話 やってやるよ。クソジジイ

俺達は、とりあえず今日の宿を探しに行った。

就職都市『フロイス』の宿はさつきも言った通り、格安だ。

しかも俺達にはこの『フロイス』に来るまでに潰しまくったモンスターから失敬した所持金が沢山残っているので、一応数週間は保つだろう。

しかし、早めに職を得なければいけない状況なのには変わらない。モンスターを倒して日金を稼いでもジリ貧だ。早めに安定した職につかないといけない。

そしてすぐに宿は見つかった。神殿ハローワークに近い宿だった。夕食を取り終わると、俺とボレアスは部屋へと向かった。

「はあつ。どうすればいいんだろーな……………」

この町に来るまでずっと野宿だったので、久々のベッドの感触が心地よい。しかし、当面の問題は山積みだ。

俺はいまいますしいあのクソ神クソのせいでレベルが上がらない仕様となっている。それではもう書類審査で落ちる。

かといつてのろのろと資格習得にチャレンジし、資格を得たとしても果たして職が見つかるのだろうか？

「もうとりあえず、もう今日は寝よう……………」

「ああ。そうだな……………」

うだうだと頭を悩ませ続けても仕方が無い。

とりあえず、長旅で疲れきった体を休ませる事に専念しよう……………」

俺とボレアスはそのまま眠りについた。

朝。

起きてみると、久々のベッドの効果は抜群のようで、気持ちよく目覚めた上に疲れも完全にとれていた。

部屋の窓からはまばゆいばかりの朝日が差し込んできていた。

よし、とりあえず今日からまた頑張ろう。

隣のベッドからボレアスも起きて、そしてその後俺とボレアスは支度をして、朝食をとるために一階の宿の食堂へと降りていった。

食堂はまだ時間が早いせいか、人の数自体はあまり多いとは言えなかった。

俺とボレアスは注文した朝食が来ると、それを食べ始めた。

「そつえば、どうしてボレアスは駄目だったんだ？」

「うん。どうやら僕のレベルではまだ就活するには少し不足みたいなんだ。最低ラインが十レベルから。勿論、レベルが高くなればなるほど良い所に就職出来るけど」

なるほど。という事はレベルが高ければ高いほど高学歴、という事が解りやすいゲームだ。よのなか

「はあ。だったら俺に就職は永遠に無理だな」

最早八方塞だ。

「アンタ等、もしかして就活してるの？」

ふいに、食後のデザートにいちごパフェを食べている俺とボレアスに声がかけられた。

声の方向を振り返ってみると、そこに居たのは俺とボレアスと同じぐらいの年齢の少年（因みに俺は高校二年生。高二病真っ盛りだ）。

額にはなにやらタオルを巻いていて、いかにも職人、という感じだが、しかし、手には指輪だのなんだのがはめられている分、なんか、ちゃらい。

そういえば、中学時代はこんな感じのちゃらい奴は大体タバコを吸っていて、なんか弱そうな奴を見かけるとすぐにかんできたりと、まあ要するに不良に俺はおびえて暮らしてたのを覚えてる。

しかし俺は一応これでも頭が良く、地元ではTOP成績を誇る高校へと進学している。

どうだ。見直しただろ？

「誰？」

ボレアスが素朴な疑問を投げかける。

「おっと。コイツは紹介が遅れたな。俺の名は『コークス』。で、質問だ。アンタ達、もしかして職を探してたりする？」

「ああ」

「ふ〜ん。でもその様子じゃあ上手くいってないみたいだな」

「ほっとけ！」

しかし、このコークスとか言う奴はどうして俺達に話しかけてきたんだらう？

「ま、そう警戒するな俺はお前達に職を紹介してやるうってんだから」

「「はあ!?!」」

コークスが唐突に俺達にとっては願っても無いような事を言い出したので、とりあえずは内容を聞いてみる事にした。

話を聞いてみると、コークスはこの町の鍛冶屋の息子らしい。父親はこの町でも屈指の鍛冶師で、その跡取りを探しているらしいのだ。

要するに、コークスが提供する『職』というのは鍛冶屋の事だろう。

俺達はとりあえずその話にのる事にした。そして、現在はコークスと町の鍛冶屋へと向かっている道中だ。

「職を提供しておいてなんだが、あのクソジジイの機嫌をそこねるとかなりめんどくさいからな。気をつけるよ」

それはつまり、職人キャラお馴染みの気難しい性格、というヤツだろうか。隣を見てみるとボレアスも薄々勘付いたらしい。

案内された鍛冶屋はレンガ造りの小屋のような建物で、中に入ってみると武器を作るための道具や、作り終えたであろう武器でいっぱいだった。

「おいクソジジイ! 従業員を連れて来たぞ!」

コークスが小屋の奥へと向かって叫ぶ。

そして、奥から出てきたのは厳しい顔つきのお爺さんだった。手にはハンマーのような物を持っている。武器を作るために必要な道具なのだろうか。

「オラ、お望み通り従業員を連れて来てやったぜ。感謝しろよ」

「フン。人を探す事ぐらい誰にでも出来る。問題は、使えるかどうかだ」

じろり、とお爺さんは俺達をにらむ。

使い物になるかどうかと聞かれると、昨日の神殿での公開処刑ハローワークっぷりを見てもらえば解るが自信が無い。

「……鍛冶屋にレベルは関係無い。必要なのは気力だ」

いや、レベルは関係あると思う。

「しかし、無駄に馬の骨を鍛えても意味が無い。ここは一つ、採用試験を受けてもらう」

「採用試験？」

試験があるとなるとこれは余計に不安だ。

俺のスキルはレベルや能力値をあげてくれるわけじゃない。レベルや能力値が関係してくる試験だと完全にアウトだ。

「『エンペラー鉱石』、という物を知っているか？」

「あっ、知ってます」

「俺も知ってる」

『エンペラー鉱石』、というのは素材アイテムの中でも高ランクの素材だ。

素材アイテムには一番上から『S』、『A』、『B』、『C』、と、最低の『F』ランクまでの七段階が存在する因みに『エンペラー鉱石』はAランク。

どうやらこの世界は俺のプレイしていたゲームの町並みと違うようだが、スキルや魔法、アイテム等は同じのようだ。

「『エンペラー鉱石』は確かAランクの素材アイテムで、様々な剣に加工する事が出来るっていうレア鉱石ですよね？」

『エンペラー鉱石』は確かに『様々な剣』に対して加工する事が出来る。しかし、その仕様用途はあくまでも『剣』のみだ。

簡単に言うと、剣にのみ加工する事が出来て、銃や盾や防具には加工出来ない、という事だ。

「知っているのならば話が早い。『エンペラー鉱石』二十個をここに持ってきたら、合格だ。ここで雇ってやる」

「なっ!? バカジジイ! 無理に決まってるだろ! 『エンペラー鉱石』はAランクのレア素材だぞ!? しかも『エンペラー鉱石』はAクラス以上のダンジョンでしか採掘する事は出来ねえんだ! そんな無理難題を押し付けるんじゃないやねえっ!」

そしてコークスは俺をびしっ! と指差す。

「そして見ろっ! コイツのステータスをつっ!」

勇者 レベル：—

体力：—

攻撃力：—

防御力：—

すばやさ：—

MP：—

装備

残念な服

残念なズボン

残念な靴

残念な剣

残念な盾

「こんな残念なレベルでAランクダンジョンに行けば、残念な死に方をするだけだっ！」

「それほど言わなくても、ソイツの残念なステータスはちゃんと見えとるわい」

「残念残念うるせえなっ！ もう聞き飽きたんだよっ！」

くそっ。俺が一話から四話にかけて、どれだけ『残念』と言われ続けてきたんだと思ってるんだ。

「……………それでは……………やるんだな」

お爺さん、いや、ジジイが俺をにらむ。

「ああ。その試験、やってやるよ。クソジジイ」

就職都市『フロイス』は、都市としてそれなりの規模を誇っている。

よって、『ギルド』という、様々なクエストが集まる集会所のような所も完備されている。

俺達はとりあえず、ギルドに足を踏み入れた。中にはダンジョンに挑戦しにきた者達でいっぱいだ。

「Aランクのダンジョンならどこでもいいよな」

「……………本当に行くの？」

Aランクダンジョンの前ではゴミのようなレベルを誇るボレアスはやはり不安なのだろう。

「まあお前のその残念なレベルで不安なのは解るけど」

「今残念なレベルって言った？ それ、君だけには言われたくないんだけど」

日頃の恨みだ。畜生。

ふはははは！ 立場逆転！ ボレアスがゴミのようだ！ ありがとうAランクダンジョン！ 俺に優越感を与えてくれて！

「で、どのダンジョンを受けるんだ？」

「………なんでお前がこんな所に居んの？」

そしてなぜか、俺達と一緒にいて来たコークスも一緒だ。

「………あんなクソジジイと二人きりで居れるかよ。間が保たねえからな」

なるほど。

「っと、とりあえずまずはクエストを探すか」

俺は『ダンジョン表』をパラパラとめくる。

そしてふと、あるページでその手が止まった。

Aランクダンジョン

ダンジョン名：『広大なる大地』

出現モンスター：鉾龍ゼーゲルコーン等

注意 鉾龍が出現します。Aランクダンジョンの中でも危険度トップクラスのダンジョンです。

鉾龍ゼーゲルコーン、というモンスターは、『鉾龍』のという異名を持っているモンスターだ。体の色々な所に、色々な鉾石を纏っている。

コイツなら、『エンペラー鉾石』も大量に纏っているに違いない。

「え？ それやるの？ それってAランクの中でも結構危ないダンジョンクエストだけ？」

「それはちょっと止めない？ ホラ、僕のレベルの事も考えて・・・」

「ゴミのようなレベルの奴等の事なんか知るか」

「お前だけには言われたくないっ！！」

結局、俺は二人の反対を押し切り、Aクラスダンジョンにチャレンジする事にした。

勇者 レベル：一

体力：一

攻撃力：一

防御力：一

すばやさ：一

MP：一

ボレアス レベル：十

体力：三十

攻撃力：十六

防御力：十四
すばやさ：十四
MP：十五

コークス レベル：十

体力：三十五
攻撃力：十八
防御力：十八
すばやさ：十八
MP：皆無

なぜか、コークスのステータスの一番下を見て不安になった。

第六話 「コマンドとしては『にげる』をオススメする

ダンジョン。

そこには様々なアイテムや宝が潜む場所。同時に、多くのモンスターの潜む場所でもある。

そして、人が『ダンジョン』に行くケースはおおまかに分けて二通りある。

よく、商人や武器屋、鍛冶屋等の人々は、自分達の代りにダンジョンに行き、素材を入手してくれる者達に依頼をしているケース等もある。それが、『代行クエスト』。

逆に、誰からの依頼も受けずに、個人でダンジョンに挑んだり、パーティを組んでダンジョンに『何か』を求めて挑む場合。それは『ダンジョンクエスト』と呼ばれる。

そして俺達の場合は、後者である。

『広大なる大地』は、以前俺がプレイしていたゲームの世界には無かったダンジョンだったのだが、まあ基本的には通常のダンジョンと変わらない。

地上から下へ下へとアイテムやモンスターを求めて進んで行く。

ただ、問題なのは通常の（俺が以前プレイしていたダンジョンに比べるとだが）ダンジョンと比べて、ワンフロアがとてつもなく広い。

恐らくこれが、『広大なる大地』というダンジョン名の由来なのだろう。

「つ、疲れた……」

『広大なる大地』は全部で地下十階まで。これはAランクダンジョンにしてみればかなり低い。

しかし、その分ワンフロアが広いので探索には骨が折れる。

それに加えて、俺の体力数値は『一』。

他の二人よりも体力がどうしても低いので、疲れやすい。

「何言ってるんだよ。まだ地下二階じゃないか」

「ケツ。体力五十越えのリア充共が」

「それだと基本的にこの世の大半の人がリア充になっちゃうね」

「当たり前だろ。この世はリア充七、非リア充三の、七：三のバランスで成り立っているんだよ」

「君は勿論『三』の方だよな？」

「うるせえ!」

ぶつちやけ、このAランクダンジョンは一番上から二番目のランク。よって、通常ならば終盤辺りから受けるダンジョンであるのだが、レベルが序盤丸出しの二人をつれてモンスター相手に（俺が）無双していると、経験値の振り分け上、どうしても二人のレベルがガンガン上がっていつてしまう。

因みに現在のレベル。

勇者 レベル：一

体力：一

攻撃力：一

防御力：一

すばやさ：一

MP：一

ボレアス レベル：二十

体力：五十

攻撃力：三十五

防御力：三十四

すばやさ：三十三

MP：三十四

コークス レベル：二十

体力：五十五

攻撃力：三十八

防御力：三十八

すばやさ：三十八

MP：皆無

相変わらずコークスのMPは皆無。

しかし、ボレアスに比べれば全体的に能力値は高い。

一応は鍛冶屋の仕事を手伝って体を鍛えたので体の基礎作りは出来ているらしい。

「いやあ。しかし、これだけ倒しても上がらないもんだねえ。レベ
ル」

「不思議な体質してるな。お前」

「不思議な体質って．．．．．まあ言っなればそうだが」

「いや、不思議な体というより．．．．．残念な体質？」

「言い直しちゃったよ！ 言い直さなくてもいいのに！」

「ほら、よくあるじゃん。某猫型ロボットの手だっで一見丸っこいけどなんかイザとなったら指が生えたりするでしょ？ 不思議具合だとあれと同じだよきつと」

「そんな国民的大人気アニメの愛嬌ある猫型ロボットと一緒にするな！ 格が違いすぎてあちらに迷惑かけるわ！ しかも意味が解らん！」

「そうか。ならあれだ。某特撮ヒーロー物のドラマみたいに変身中に限って敵が攻撃してこないみたい不思議だな」

「やめる！ 特撮ヒーロー物は子供達と大きいお友達の浪漫であり夢なんだぞ！ 無粋な事を言うな！」

というよりこうやって自分の残念な体質をまじまじと解説されるのはなんか嫌だ。

「つか特撮ヒーロー物の悪口はやめる。あれだからな？ 最近の特撮ヒーロー物は凄いだからな？ おもちゃなんかメチャクチャ売れてるんだからな？ そして俺もその購入者の一人なんだか

らなああああああああああ！！

なんだかんだで俺達は（というより主に俺が）疲れながらも地下八階までたどり着いた。

『エンペラー鉱石』が採掘出来るのは地下五階からだ。

採掘道具もちゃんと持ってきている事だし、一応採掘出来る事は出来るのだが、二十個も採掘しなければいけないとなると、最下層まで足を踏み入れなければならぬだろうし、時間もかかるだろう。それならば、『鉱龍ゼーゲルコーン』を倒して、纏った鉱石をいただいた方が早い。

よって俺は頑張つて『ゼーゲルコーン』を探しているのだが．．．

「あつ。一個採れた」

「こつちも採れたぞ」

この二人は頑張つて地道に稼いでいるようだ。
もうこれで十個目か。

「．．．．．この調子だとんだか『ゼーゲルコーン』にたどり着く前に集まってしまうな。『エンペラー鉱石』」

「集めなきゃいけないんだよッ！！」

最早必死だ。

そこをガシッ！ と俺はしっかりと二人の首を掴む。
途中で「ばきゅっ」って音がしたけど気にしないでおう。

というか、そもそも『鉱龍』は最下層に居るモンスターのハズだ
(『これさえ読めば完璧！ Aクラスダンジョンのヒ・ミ・ツ
ギルド公式ガイドブック』より)。

「げほっ。それにしてもどうしてこんな所に……………」

俺もどうしてなのか解らず、ふいに『鉱龍』の足元(というより
サイズのどうしても主に足元を見てしまう)を見ていると。
なんとなく。

その理由が解ってしまった。

まあ、簡単に理由を説明しますと。

『鉱龍』の足元に、少女が居まして。

そして『鉱龍』はその少女を狙っています。

そしてそれはつまり。

最下層から逃げてきた少女が、ついでに『鉱龍』さんを連れてき
てしまった、という話であって。

「……………選択肢「下」としては『にげる』をオススメする」と、ボ
レアス。

「異議無し」と、コークス。

「鬼かお前等は！」

「ふざけんな。俺達が『鉱龍』に挑む。それはすなわちラディッツに一人でフリーザを倒して来いと言っているような物だぞ！」

「うるせえ。お前等はラディッツどころかヤムチャだろ」

「それは聞き捨てならないな。あんな他人の戦いを端から観戦して、それで『俺はもう戦わないからな！』みたいな事言ったり、あげくの果てに某人造人間を探索してたら逆に返り討ちにあうようなヤツと一緒にしないでくれないか。反吐が出る」

それではラディッツとヤムチャが可哀想だろう。

のんきに会話する俺達をよそに、少女は必死に走って攻撃をかわし、そして逃げ続けている。

「きゃっ！」

その少女はついにというかなんというか、足元を躓いて転んでしまった。『鉱龍』の足が、真上から少女に迫り来る。それはつまり、『踏みつけ』。

「ええい畜生！」

勇者 職業：無職 VS 鉱龍ゼーゲルコーン 職業：モンスター
I / 鉱龍

『鉱龍』って、職業だったのかよ………と内心ツッコミを

入れつつ、俺はスキル『先制』を発動。

『少女に先制攻撃を行った』。

まあ俺のレベルは一なので、突き飛ばしたぐらいじゃあ『攻撃』にもならないけど。

だけど、少女を『鉾龍』の足の落下地点からずらす事は出来るだろう。

結果的にそれは成功した。

少女の反応はそれはそれはビックリしていて（まあ当然だが）。

俺は『鉾龍』の足の落下地点の真下に居るワケだ。

しかし、俺にはスキル『精霊の守り』があるのでこれぐらいじゃあ、死にはしない。

少女、セレネーは困惑していた。

自分を助けてくれた少年。

しかし、その少年の真上からは『鉾龍』の足が迫り来る。

それでも少年の顔に焦りは無かった。

そして。

ぶちっ。

と、軽い音を立てて、少年が踏み潰された。

「……………踏み潰されたな」

「……………だね」

自分達の目の前で勇者が踏み潰されてしまったワケなのだが。

一向に出てくる気配が無い。

「……………やばくね？」

「……………いや。大丈夫だよ。だってホラ、スキルもあるし」

「あれ？ でも『鉦籠』足の下からなんか、赤い液体が出てなくね？」

「違うから。アレは血じゃないから。あれはただ動物の主要な体液で、全身の細胞に栄養分や酸素を運搬したり二酸化炭素や老廃物を運び出すための媒体だから」

「それを血って言うんだけどな……………それと、一つ思ったんだけど」

「何を？」

「あくまでもスキルは『防御力』を上げてくれるのであって（それ

どころか勇者のあのスキルは『ダメージを0にする』だったが、
『筋力』はあげてもらえないんじゃないかね？」

「.....」

俺はなんとか。

なんとか助かってはいる。

なんか外で俺が死んだみたいな会話をしているっぽいけど、俺は
まあ生きている。

踏み潰された事は踏み潰されたのだが、そこはまあスキルがある
のでダメージは0。

ただ『鉾龍』に踏み潰される直前に。

思わず条件反射で。

『残念な剣』を抜いてしまって、その剣の切っ先が真上に向き、
『鉾龍』の足からなんか血がちょこつとだけ出ているのだが、まあ
それは置いておこう。

しかし今のこの状況的には足で踏み潰された画鋐の気分だ。

ただ。

問題なのは。

なぜか『鉾龍』が足をどけてくれない、という事だ。

まあスキルがあるので確かに俺にダメージは無いのだけれども。
筋力までは強化してくれない。

まあ、確かに画鋐って踏んだら痛いよな。多分今頃『鉾龍』も
涙目で動けなくなっているであろう。はっはっはっ。計算通り計
算通り。

よして。

俺はこのまま身動きがとれないでいた。

「……………いや……………マジでぶっつよっ……………」

画鋲の如く踏み潰された勇者っていうのもなんだか残念すぎるだ
ろ……………

第六話 コマンドとしては『にげる』をオススメする（後書き）

ついにヒロイン、セレネーが登場！（まだ殆ど何もしていないけど）

．．．．．六話になってヒロインが初登場とか。

へ、別に忘れてたわけじゃないんだからね！？（汗）

第七話 『威圧』なんかあるの？　なんか心なしか涙目なんだけど

前回のあらすじ。

モンスターに踏み潰されて地面にめり込んで出られなくなっている勇者。

．．．．．いや。本当にそうだから困る。

というか、『鉾龍』が踏みつけた事により、そして俺には攻撃が効かないスキルが働いた事により。

俺はダメージを受けていない代わりに地面にめり込まれたままなのだが。

まあダメージが無いのはいいとして。

しかしそれでも問題はあつて。

踏みつけた足が一向に動かない。

俺の持つスキルの中に筋力を強化してくれる物なんて無い。

よつて、『鉾龍ゼーゲルコーン』が動いてくれないと、反撃も出来なければここからどく事も出来ないのであつた。

．．．．．っーか。

もうそろそろ助けてくれない頃なのに。

一向に助けが来ないのはどうなっているんだ。

あいつ等もしかして俺を見捨てたか？

ありうる。

そもそもあの少女．．．．．まあ、女の子を見捨てようとしたんだからな。

まあ俺も見捨てられるのも解る。

そういえば。あの女の子はどうなったのかな。それにしても可愛かったけど。うん。可愛かった。

そしてボレアスは人数分の紙コップに、人数分のお茶を入れる。
コークスは自分の紙コップを持って、立ち上がる。

「え〜。それでは。勇者のご冥福を願いまして。乾杯！」

「乾杯」

「かんぱい．．．．．？」

うう．．．．．ダメだ．．．．．。

一向に助けが来る気配が無い。

というか嫌だぞ。踏み潰されたまま一生を終える勇者って。

何か良い手は．．．．．

『あつ。そうだ。僕レジャーシート持ってきてたんだけど。ここで
お茶でもする？』

．．．．．は？

『そうだな。モンスターもなぜか出てこなくなったし。アンタもど
うだ？』

この声はコークス？ ていうか何さりげなく誘ってんの？ 無駄
にそんな所でチャラ男っぷりを発揮させるなよ！ 確かにお前は金
髪手には指輪ジャラジャラのチャラ男設定だけど実は鍛冶師の仕事
を手伝っていて体はしっかり出来ているという設定だろーが！

そんな所で無駄にチャラチャラしてんじゃねえよ！ もはやお前が言つとナンパなんだよ！ お前が出来るのはナンパじゃない！ 難破のハズだ！ いい加減自分のキャラ設定を定着させるよ！

『……………いいの？』

これは……………あの女の子？ 可愛いらしい声してるなあもつ！

『オツケーオツケー。可愛いから。むしろ大歓迎』

『そういう所チャラ男って思うよ。僕』

『お褒めの言葉、有難う』

褒めてねえよ。

『え〜。それでは。勇者のご冥福を願ひまして。乾杯！』

だから死んでねえよ。お前を冥土にぶち込むぞ。

『乾杯』

うわ。冷静に乾杯って言ってるし。

『かんぱい……………？』

ああつ。もつ！ 少し戸惑っていてくれる所が可愛いなあもつ！

……………つか。今のままでとやばくね？ 普通に生き埋めにされるんじゃない？ 俺。

『そついえば、名前は？』

『．．．．．セレネー』

セレネーか。可愛い名前だな。

『へー。セレネーか。可愛い名前だなあ』

ぐああああああああああああああああああ！ 畜生！ こんな
チャラ男と同じ事を思っていたのか俺は！

『セレネーちゃんは どうしてこんな所に？』

ああ。ボレアスは同年代の女の子には大体ちゃん付けだったな。
村でも。

『地上の落盤事故に巻き込まれて．．．．．気がついたら最下層
にいた』

『そりゃ大変だったな。他のモンスターも襲ってくるだろうにこん
な『鉱龍』に襲われて』

『．．．．．ゼーゲルコーンはこのダンジョンの主。だからゼー
ゲルコーンが居る所にはゼーゲルコーンが持つスキル、『威圧』で
モンスターが襲ってくる事はないから．．．．．』

『なるほどね。だから他のモンスターが襲ってこないんだな？ そ
の『威圧』で』

『あつ！ テメっ！ 何自分の記憶から俺を抹消しようとしてるんだ！ 後で覚えてるよ！』

「全く。ヤツとは長い付き合いだったが．．．．．これだけは言える。アイツは．．．．．勇者のヤツは地獄あっちに行っても笑って暮らせる、つてな」

『ふざけんな！ お前自分の初登場は何話か思い出してみろ！ 五話だろうが！ まだこの話入れても三話目だろうが！ それでよくも『長い付き合い』とか言えるな！ それに何気に『あっち』を『地獄』にして呼んでんじゃねえよ！』

「嗚呼。勇者の魂よ。永遠に」

『お前を地獄に叩き落すぞ！』

「勇者の事は残念だったよ．．．．．勇者が量産された暁には連ゼーゲ邦ルゴーンなどあつという間だったのに」

『それ物凄く不吉な言い回しじゃねーか！ それ絶対に俺死ぬよね！？ 戦闘機に特攻されてその後白い悪魔に斬られて死ぬよね！？』

ぶっちゃけ言ってしまうと。

二人は別に助けてもいいとは思っている。
本心は。

だけど本心と表面上の心は違う。

違うから本心があつて、違うからこそ表面上の心があるのだから。
ゼーゲルゴーンの足を退ける、という事は、二人には不可能だと

解っていた。

なぜならそれぐらいの筋力なんて普通の生身の人間が得られる物じゃないし、それにそんな浮遊魔法をボレアスは習得していない（コークスはMPが皆無なので論外）。

だから最早諦めるしか無い。

と、いう事を説明するボレアス。

その後、勇者のギヤーギヤーとした声は聞こえなくなった代わりに、「しくしくしく」というそれはまるですすり泣くような哀れな声が響いてきたという。

.....。

なんか、さあ。

泣いても、いいよ、ね？

つーか泣いたけど。

しかも無駄に張り切っちゃってさあ。冒頭で。

『よって、『鉦龍ゼーゲルコーン』が動いてくれないと、反撃も出来なければここからどく事も出来ないのであった』

って言ったけど。

反撃どころか鉦龍コイツは今必死に涙目になりながら痛みを耐えててそれどころじゃねえよ！ 攻撃の気配なんかほとんどねえよ！

無駄に張り切っちゃった俺が恥ずかしいよ！

つーか今は自分の恥をプレイバックしている時じゃない。

どっやって本当にまずは本当に。

どっやって脱出しよう……この『THE・画鋏』状態か
ら。

そして。

その時。

フワツ、と俺の頭上の『鉾龍』の足裏が、浮いた。

「えっ………?」

あの役立たず二人組じゃないとすれば。

それはつまり。

「セレネー………?」

この浮遊魔法の感覚は、やっぱりセレネーの物だった。

しかし、これだけの質量を浮かせるなんて、それはとてつもなく
難しい事なのだ。

「早く。出て」

「お、おう」

俺は『残念な剣』を『鉾龍』の足裏から引っこ抜いた。同時に、
ダッシュで足裏着地ポイントから脱出する。

この浮遊魔法は確かに、セレネーからの物だった。

とうとうより。

この魔法、というより。
セレネーのレベルって……。

セレネー レベル：四十七

体力：二百七十五

攻撃力：二百十六

防御力：二百四

すばやさ：二百二十七

MP：三百四十五

ゼーゲルコーンを倒す平均的なレベルは五十台。
そして確かに、セレネーも逃げなきゃいけないレベルなのは解る
けど。

それでもレベルの割りにMPがとんでもなく高くて（この分だと
魔法力も高そうだ）。

そして俺達なんかよりもレベルがとんでもなく。遙かに。圧倒的
に。

高かった。

というか次元が違っていた。

第八話 あれは燃えであり萌えなんだ！

で、出られた……。

くそう。まさか人間が踏み潰されてるのにのんきにティータイムにしゃれこまれるとは思わなかったぜ。

しかし、この女の子……セレネーも何気にレベルがとてつもなく高いな。

セレネー レベル：四十七

体力：二百七十五

攻撃力：二百十六

防御力：二百四

すばやさ：二百二十七

MP：三百四十五

……いや。

高すぎる。特にこの序盤のレベルの俺達からみたら。

勇者 レベル：一

体力：一

攻撃力：一

防御力：一

すばやさ：一
MP：一

ボレアス レベル：二十
体力：五十
攻撃力：三十五
防御力：三十四
すばやさ：三十三
MP：三十四

コークス レベル：二十
体力：五十五
攻撃力：三十八
防御力：三十八
すばやさ：三十八
MP：皆無

恥ずかしい！ 自分達のステータスだけ物凄く恥ずかしい！
しかも俺達全員のレベルを足してもセレナー一人に及ばないなんて！
女の子一人に負ける勇者とその愉快的仲間達ってどうよ！？
これは冗談抜きで凹むわ！

「あ……………えっと……………」

「？」

ありがとうだ。ありがとう。「どうもモンスターの足をどけて
ただいて有難うございました」だ。

「何？」

「コイツを倒す事は出来る？」

「無理」

だろうな。だからこそ逃げてたわけだし。

「ボレアスとコークスは．．．．．ああ。なんかごめん。聞くまでも無かったな」

「そんな悲しい目で見るとツツ！！」

フツ。レベル二十か。ゴミめ。

「と、とにかく！ 復活したんなら早く倒してよ！」

ああ。そうか。

俺にはこのゴミ二人と違って能力値が低くても『スキル』があるから余裕だったな。

「くらえ！ ひっさつこんぼうアタック！」

「うわ．．．．．技名言っちゃってるよ．．．．．恥ずかしくないのかな。ていうか残念すぎるね。技名とか」

何やら聞き捨てならない声が聞こえたような気がしたが、気にしないでおこう。

そして俺はこんぼうを片手に一気にゼーゲルコーンに飛びかかり

.....。

「言うなって。本人はノリノリなんだから。技名が残念だけど」

飛びかか.....。

「ああ。それもそうだね。哀れだけどそっとしておこうか。それにしても残念な技名だ」

飛（ry.....。

「聞こえてるから！ 完全に聞こえているから！ ていうか残念な技名とかいうな！ 俺本人に言われてるならまだ対応しやすいけど俺じゃなくて技名を残念と言われると対応しづらいわ！ それにお前ら必殺技を叫ぶ事はそれほど悪くないんだぞ！」

「「例えば？」」

「某二人で一人の仮面ライダーだつてしょっちゅう言ってるだろ！ ジョーカーエクストリームとか！ ダブルエクストリームとか！ ライダーキックとか！ それがどれだけ俺の少年心をくすぐったと思う！ あれは燃えであり萌えなんだ！ 男の浪漫なんだよ畜生！」

「ああ。そういえばやってたね。そんな仮面ライダー。アレは結構面白かった」

「でも非現実フィクションと現実ノンフィクションをこっちゃにするなよ。実際に必殺技名を言うのは痛々しいぞ。結構。そういうヤツに限ってクラスで浮くんだよ」

「名前あつたんだ……………」

因みに今命名した。

トン、と、地面に軽く着地する。

しかし。

ゼーゲルコーンは、まだ倒せていなかった。

「ッ!？」

「……………ゼーゲルコーンの第二のスキル。『鉱石の鎧』」

これはセレネーの声だ。

そうだ。忘れていた。

ゼーゲルコーンには『鉱石の鎧』という特殊スキルがあるんだっ
た。

特殊スキル、というのは通常のスキルとは違い、そのモンスター
にのみ備えているスキルの事だ。

そしてゼーゲルコーンの特殊スキル、『鉱石の鎧』の能力は、ず
ばり『一撃封じ』。

簡単に言ってしまうえば。

『一撃で倒す』という事を封殺するスキルだ。

……………やばくね？

そもそも。

俺の戦闘スタイルは、『スキル』を使って相手を一撃で倒す事が
主体となっている。

「……………ある。そういえば」

忘れてた。

と、いうより思い出した。

確か『半殺し』……………じゃなくて『峰打ち』というスキルだったはずだ。

効果は『相手モンスターの体力を四分の一にする』だったけ（ただしボスには効かない。そんな事になったらタダのクソゲーだ）。

ただし、これも例によって命中率が10%以下と低い。

まあ、そこはホラ。俺の他の『スキル』でカバーするのだが。

「体力を四分の一にまでなら減らす事は出来るけど」

「それで十分」

……………なるほど。セレネーのレベルなら、俺が体力を四分の一に減らせば『鉦籠』を一撃で倒す事が出来るのかもしれない。

「ああー。でももう武器がないしな……………素手は痛そうだから嫌だし」

「その腰の残念な剣は飾りか！」

「飾りだ！」

残念な剣つてもうネタ以外の何物でも無いだろう。

でもまあとりあえず。

今はこの残念な剣で我慢しよう。

そして俺は

『鉦龍』に、飛びかかった。

「おつりやあああああああああああああああああああああああああ
あああああッ！！」

スキル。

『峰打ち』を発動。

バキッ．．．．．！ と、何かが砕けた音がした。
しかし、俺の手元の『残念な剣』は折れてはいない。

今度は。

『鉦龍』纏っていた鉦石が砕けた音だった。

俺が地面に着地すると同時に、セレネーが魔法を発動。
纏った鉦石が砕けた『鉦龍』の胴体の真上に現れたのは、
巨大な水の槍。

この魔法は知ってる。
最大レベルの特大魔法。

『水の槍Lv三』。

魔法にはそれぞれ、Lv一〜Lv三までの三段階があり、その内
その魔法の最低威力のレベルがLv一．．．逆に最大威力のレベルがL

LV三だ（と言っても、レベルが存在しない魔法もあるが）。

魔法レベルが上がると、その魔法の威力が上昇する。魔法が進化すると言ってもいい。

しかし、魔法レベルを上げる事はとても難しいし、ゲーム形式で進めるならそりゃ魔法レベルを上げるだけで済むが、前回の転生の経験から言わせて貰うと、LV二ならばともかくLV三に到達するにはある程度の才能を要する。

それをいとも簡単に発動するとは……セレーはやっぱり魔法に関しては凄い才能があると見て間違いないだろう。

ドンツ！！と、『水の槍』がゼーゲルコーンに炸裂する。

そして、今度こそゼーゲルコーンを倒したようだ。

経験値が、俺達（勿論、俺以外だが）に振り分けられる。

勇者 レベル：一

体力：一

攻撃力：一

防御力：一

すばやさ：一

MP：一

ボレアス レベル：二十五

体力：五十

攻撃力：五十五

防御力：四十四

すばやさ：四十三
MP：四十四

コークス
レベル：二十五
体力：六十五
攻撃力：四十八
防御力：四十八
すばやさ：四十八
MP：皆無

セレネー
レベル：四十八
体力：二百七十九
攻撃力：二百十七
防御力：二百十
すばやさ：二百三十
MP：三百五十一

俺以外の奴等は当然レベルアップ。

．．．．．つーかボレアスとコークスが経験値を貰うのは納得
いかないぞ．．．．．。

まあ、そんなこんなで俺達は『エンペラー鉱石』を二十個分回収
し。

地上へとようやく脱出する為に地上への階段を上る。
しばし雑談。

「そういえばセレナーはなんであんなに強いんだ？ 誰かに魔法とか教えてもらってるの？」

「……学校、に通ってる」

ほう。なるほど。

学校、か。

そこで色々と何か学んだりしたから強いのだろうか。学生の中にレベルを上げている学生は珍しくないが。

しかし。とは言っても。レベルを上げると言っても。それはそれは些細なぐらいのレベルアップだ。

何しろ学生の範囲でしか行えないのだから。

それなのにこれだけのレベルを上げる事が出来るのは本当に努力を重ねてきているのだろうか。

とは言っても。

戦闘職業を変えただけでそのレベルは一へと戻ってしまうのだが。例えば学園に通っているのならば『学生』。就職した時点で『学生』という職から変わる事になるのでレベルは初期化されてしまう。職業を変えても高レベル時に習得したスキルや魔法は引継ぎ出来るので『学生』の間にレベルを上げるのはそう悪い事では無い。むしろメリットもあるだろう。

可愛いだけじゃ無いんだな。

「ああ。頑張ってるな。セレナーは。俺なんか未だ無職だしよー。レベルだからって公開処刑されたあげく無理って言われたし」

「……経歴を作れば良いと思う」

「？」

「学園かどこかで卒業して、経歴を作れば、レベル関係で不利な分を埋められるかもしれない」

「……その発想は無かった。」

「そうか。そういうえば俺が元居た世界でも『高学歴』という言葉ぐらいはあったな。」

「そうだ。そうだよ。」

「運動が出来なくても勉強で経歴を得た人が居るように。」

「勉強が出来なくても体力で経歴を得た人が居るように。」

「学園でなにかしらの経歴を作れば、もしかしたら就職で有利になるのかもしれない。ついでに学園生活の合間に鍛冶屋でバイトして何かしらの資格も得られれば。」

「俺の全能力値^{ハンデ}一を埋められるかもしれない。」

「……結構、アリ？」

「俺は就職への道筋が一つ見えてきたような気がしたので。」

『エンペラー鉱石』が二十個詰まった重い袋も軽く感じた。

「……ていうか、なんで俺が荷物持ちなんだ？」

第九話 男なんてただのカムよ

「うわ……………ちょっと引くわ」

ぶつちやけ殴りたくなつた。

マジで。

まあしかし、晴れてこれで鍛冶屋に雇ってもらえる事になつたので、なんとかなつた事にはなつた。

とは言つても扱的にはバイトレベル。

安定したとは言えない。

そして、バイト生活一日目。

「いいか。俺の事は『親方』と言え。何かあつたら知らせろ」

「親方。勇者が躓いて運んでいた鉱石が全部ばら撒かれました」

「親方。勇者が体力の限界で力つきました（体力一だし）」

「親方。勇者がこけた時に床に顔をぶつけて瀕死状態です（防御力一だし）」

「親方。勇者が（ry）」

俺は結局。

一日目で雑用係へと職業チェンジした。

最早俺に出来るのは「邪魔」と言われながら隅っこの方で体育座りする事だけだ。

「……………」

「？ 泣いてるの？」

「……………泣いてない」

なぜだかセレネーのその哀れみのこもった目が、悲しかった。

雑用係生活四日目。

俺はセレネーと共に買い物へと出かけた。

まあ、ただの買出しだ。

雑用が板についてきた俺にとって、これぐらい造作も無い。

この四日間。

セレネーはちよくちよく、鍛冶屋に顔を出してくれた。

こっちとしてはむさくるしい男ばかりの所で雑用スキルを磨いているところというひらひらスカートの制服姿の女の子が居るとなんだか華やかな雰囲気になるので嬉しい、が。

学校の方はどうなんだろう。

そんなにもちよくちよくと顔を出してくれるのはありがたいが、学校の方をおろそかにされればそれはそれで本末店頭だ。

「違う。店頭じゃなくて、転倒」

「あ、そうかそうか。そうだったなっとうおおっ!？」

心の中を読まれてる!？

「……………言葉に出てたけど」

「……………」

いや。まあ……………お恥ずかしい。

「それはそうと。本当に学校の方は大丈夫なのか？」

「うん。こっちの方が、楽しい」

ちゃんと通ってる事は通ってる、のか？

というより、あのむさくるしい所の一体何処が楽しいのか。

ボレアスの奴なんか日に日に少しずつ筋力がついてきていずれムツキムキのガツチガチになるのかと恐れている自分がいるのだがそれは認めない。絶対にだ。

……………あれだよな。急に二メートル級になって俺の襟首をつまんで持ち上げたりしないよな？

「楽しいって……………どのくらい楽しいんだ？ あんな所」

「過ぎ去ったあの頃の夏休みと同じくらい」

「解りにくい上に切ない！」

あの頃って何時だ！？

「あの頃は若かった」

「お前は今一体何歳だ！」

な、なんて奴だ！ 今まで無口だとか、あんまり感情表現豊かじゃねえなと思ってたけど案外ツッコミ所があるじゃねえか！

「ふっ。ふふっ」

「．．．．．笑った？」

「多分。初めて。」

「．．．．．笑った、よな。今」

「？ うん」

「えっと、因みにさっきの『あの頃の夏』のくだりは？」

「コークス君に教えてもらった」

「変な事教わってるんじゃない！」

「一体何を教えてるんだ！？ アイツは！？」

「『勇者との正しい会話の仕方』より抜粋」

「本当に一体アイツは何やってるんだ！？ 忙しいバイトの最中、何無駄な事を教えてるのアイツ！？ 黙って働けよあのチャラ男が！」

「しかも『勇者との正しい会話の仕方』って何それ！？ マニユアルか何か！？」

「今までセレネーって感情をあまり表に出さないクールビューティキアラだと思っていたけど違った！」

「ただ『おとなしい』だけだった！」

「話してみると案外面白い奴だった！」

「……………ま、まあとりあえず、買い物を買いますか」

「そうだね」

これ以上続けければ俺の身が保たない。

ツッコミすぎて。

某万事屋の新八もかなりツッコんでるよな。あれ。

よくもまああんなハードにこなせるもんだ。これからは敬意を込めて新八さんと呼ばせていただく。

しかしあれだな。

俺のポジションは某万事屋で言うなればまさしく新八さんポジションではないのであるうか。

と、思ってみた今日この頃。

俺達が(というより俺が)買うように頼まれた物は食材だ。

もっと言えば夕食の。

今日は『にこやかデパート』で半額セールを実施する日だ。

雑用暦四日のこの俺は最早半額セールのベテランだ。

……………ごめん。見栄はった。ぶっちゃけ初めてです。はい。

そう、半額セールとは最早俺にとっては未知の世界。

通いなれた魔王の城よりもミステリアスだ。

中では日々、凄まじき戦士達が争っているという。

……………これは誇張しすぎか。

まあともかく、俺にとっては未知の世界であるという事が伝われば、それでいいだろう。

んー。なんというか、半額弁当を賭けて命がけで争うラノベを思い出した。

「ベン・トー？」

「そうそれ。．．．．．って知ってるのかよ！」

「アニメを見たけど面白かった」

「ああ。面白かったな。あのバカみたいなノリが面白くて．．．．．
じゃなくて」

俺が問いたいのは、なんで俺の心の中が読めるの？ だ。

「なんとなく、予測がついたから」

「どれだけ簡単なんだよ俺の心は！ ちょっと悲しくなったわ！」

とかなんとかで。

にこやかスーパーに到着。

勇者が半額セールを求めてスーパーに入る、なんてこれはこれで
シュールな光景だ。しかも隣にはひらひらスカートの子装備で。

残念．．．．．でもなく最高じゃないか。

デートみたいで。

．．．．．いや。やっぱりスーパーという舞台が残念だ。

さっそく店内に入る。すると直後に。

「え〜！ それでは今から『魔王のひき肉』、その他諸々の半額セ
ールを開始します！」

．．．．．え。アイツひき肉になってんの？

「つーかこの作品において魔王の扱い酷すぎるだろ。
ゲームではラスボスだよ？　ラスボス。」

「がんばって」

「お、おう」

「ま、まあ今はそれどころじゃない。」

「とりあえず今日の食料を確保しなければ俺の今日の夕食は親方の
殺人パンチとどんべえになってしまう。」

「まずは『魔王のひき肉』を取り合うライバルの確認を……………」

おばちゃんA　レベル：九十四

おばちゃんB　レベル：九十六

おばちゃんC　レベル：九十八

おばちゃんD　レベル：九十一

おばちゃんE　レベル：九十九

：

：

：

おばちゃんZ　レベル：九十七

……………グロっ。

「見て見ると金が無いゆえに半額商品を求めて立ち向かっている若

者達が消し飛ばされている。

「つーかもうアンタ達が魔王倒せよ。今はひき肉になってるけど。薄々思ってたけどこの世界色々とバランス悪すぎだろ。」

勇者 職業：無職 VS おばちゃんA〜Z 職業：主婦せんし

「A〜Zで！ 個人でかかってこいや！ なんで集団なんだよ！ しかも主婦と書いてなぜに主婦せんし!?」

「家庭の平和を守る戦士だからよ」

と、おばちゃんEが答えた。

俺は今まで家庭の平和を守ってるのは一家の大黒柱である父親の方かと思ってたのだが違うのか。

「一体何と戦っているんだよ!」

「家事という名の魔王と日夜戦ってるの。命がけなの。男なんてただのガムよ」

「ガム!?!」

「使えないっいたらありゃしない。その内、紙にくるんでゴミ箱にポイよ」

「ヒデエ！ つーかそのレベルなら本物の魔王と戦えるよ！ 最早

クリア後のレベルだよ！」

「は？ 本物の魔王？ そんなのと戦ったからってなんなの？ 家
事でも代りにしてくれるの？」

「え．．．．．いや．．．．．」

「してくれないでしょ？ そんなひき肉なんかの相手なんてしてら
れないわよ。時間の無駄よ無駄」

全国の勇者は涙目だ。

あんた等は一体、魔王をなんだと思ってるんだ。
ラスボス

「と、とにかく今は半額商品を「邪魔よ！ 退きなさい！」ごぶふ
あっ！」

今夜はどんべえ確定だ。ついでに殺人パンチも。

第十話 制服、鞆、教科書、そしてレベル

俺が鍛冶屋で無職から雑用へと職チエンジンジョブしてから、約一週間が経過した。

あれから、特に変わった事と言えばおばちゃん少し仲良くなった事ぐらいだろうか。なにせもうスーパーには毎日顔を出してゐるからな。その度におばちゃんに跳ね飛ばされてるからな。

そりゃ顔見知りにもなるっつーの。

そもそも、こうしていると当初の俺の目的を忘れそうになる。

お気づきだろうが、第五話の「やってやるよ。クソジジイ」から（我ながら酷いサブタイトルだ）、既にこれで第十話目。

．．．．．全く就活してないじゃん？

心なしか、タイトルの「しゅつかつ！」も涙目な状況だ。

そもそもジジイが「エンペラー鉱石」がどうのこうのと言いついてから少しこの物語の展開が変わったような気がする。

確かにコメディっぽく。

そしてパロディネタを織り交ぜつつ。

物語は進行しているように見えるだろう。

しかし。

しかしだ。

実質的には現在はまだバイトの身。

これは「しゅつかつ！」とは言えない。最早「ふりーたー！」だ。セレネーは現在、その学園とやらに俺達の入学手続きをしてくれてはいるが、このままだと就職活動はおろか学園物としてスタートしてしまいそうだ。

いや、まあ。

それはあくまでも就職活動に必要な物なのだ。

しかし作者はこれからどうやって展開していくのだろうか。

もう取り返しがつかねえぞ？ コレ。もういっそ開き直って「実

は異世界ファンタジーではなくて異世界学園物ですサーセンｗｗｗ」とか言っちゃうか。

いや。止めておこう。

なんか色々イヤバイような気がする。

そして、現在俺は再び買出しの為にスーパーへと赴き、なんとか食材を買う事が出来ていて、帰路についていた。

昼休みの内に早く戻っておかないとまたジジイに拳骨を喰らう羽目になる。

と、いう時なのだが。

俺はそんな帰り道の途中、見知った人物を見かけた。

長くのびた髪を、ツインテールにしている少し小さめな身長の子の子。

「デイオーネ？」

「ん？ 勇者さん？」

今更だが、やはり自分の名前が『勇者』のままなのは恥ずかしいな。

デイオーネ。

この一週間の間に知り合った女の子だ。

彼女曰く、セレネーと同じようにデイオーネも学生、らしい。

この都市で知る数少ない友人なので、見かけたからには声をかけたかった所だった。

「よう。お前、何してるんだ？」

「えっと、少し調べ物をする為に図書館へと行ってきました」

図書館か。

図書館ね。

そういえばボレアスが通っているな。

「マ田力者さんは？」

「お前なんで今、勇者の『勇』という字を分解した！？ いや、確かに俺はそのまま『勇者』と呼ばれるのは恥ずかしいと思ったけど、察してくれるのは嬉しいけど、そんな呼び方されるぐらいなら普通の方がよっぽどいいわ！」

そもそも何？ マ田力者って！？

逆に読み方に困るわ！

活字なだけに！

「……まあ、俺はまた雑用さ。全く。こここの所の俺の生活には何処にも幸せなんか落ちてないぜ。ああ、誰かあ。オラに幸せを分けてくれ！」

「そんな某心優しき超サイヤ人みたいに言っても誰も分けてくれませんよ。そつだ。勇者さん。今日は何の日か知っていますか？」

「さあ。誰かの誕生日か？」

「その通りです」

「誰の」

「勇者さんが大好きな平沢唯の声優さんの、豊崎愛生さんの誕生日です」

「その人は、人気が全く無いながらも某巨大オンライン小説サイトで楽しく小説を書いていました。そしていつも学園物の連載物ばかり書いていました。そしてある日、ふと、元々は連載用だった小説で、短編を一つ書いてみました」

「それで？」

「なんと、お気に入り登録をしてもらえたそうです！ 一件」

「一件だけ！？」

しかしたかが一件、されど一件、だ。

「まあ確かに数字上では一件だけですが、その人にとってはとても嬉しかったらしいです」

「お前は一体何が言いたいんだ」

「つまりですね、人は何もそんな大きな幸せじゃなくても、そんな些細な事でも幸せになれる、って事ですよ。だから勇者さんもそういう何気ない事で幸せになる所から始めて見れば、その内もっと大きな幸せにも巡りあえますよ」

「深い！？」

コイツは確か俺よりも歳は一歳下だったぞ！？

なぜ俺は一歳下の奴に深い事を言われてるんだ！？

アレ？ コイツ、年齢詐称してるんじゃない？

いや、とは言っても一歳差だけでも。

「因みにこれは作者の事です」

「短編書いてたの作者！？ 連載しかやった事ないクセに！」

「そうみたいです。しかしメジャー作品の作家さんにしてみれば『フツ。短編のお気に入り登録数一件か。ゴミめ』とか、『お気に入り登録数一件増えただけで喜ぶとか（笑）』っていうレベルでしょうね。しかも書いた短編も無理に学園能力バトルを短編に詰め込んだ所為で伏線張つてもすぐに回収ですから。盛り上がりもクソもありません。最終的に主人公がチートして終わりですし」

「お前結構厳しい事言うな……っ。っか色々と生々しいんだよ。このネタ」

「厳しい？ 愛のムチの間違いでしょう」

「愛が強すぎる！」

「それでもまあ、登録してくれた人には感謝ですねー。ただまあ、作者が調子に乗って『続き書くか』みたいなノリになってるのが気に入らないのですが」

「もつと愛のムチでしばいてやれ。特に頭を。っか連載でやって勝手に爆死してろ」

これ以上、作者の自虐ネタばかりしても意味が無いし、なにより時間の無駄なので、とりあえずは俺はディオオーネと別れ、再び帰路についた。

「手続きが済んだよ？」

昼休み終了間近にひょこつと顔を出したのは、セレネーだった。手続き、とはその学園に入るための手続きだろう。

「おお。サンキューな」

「別に、いい」

これで「異世界ファンタジー物」から「異世界学園物」が始まるのか。

しかしそれでも俺の就職には経歴が必要だ。

今更物語のカテゴリが変更された所で問題は無い。

「で、その学園って？」

「アテーナー学園」

直後に。

コークスが吹いた。

ついでにボレアスも。

そしてコークスがげほげほとむせながら、

「ぼふうえいふいふ」

日本語でok。

そしてかろうじて口が動くボレアスが説明を始めた。

「入学に必要な物は四つ。制服、鞆、教科書、そしてレベル」

「……………あれ？」

「今なんと？」

「？ 入学するには大体レベルが二十五以上は必要」

勇者 レベル：一

体力：一

攻撃力：一

防御力：一

すばやさ：一

MP：一

ボレアス レベル：二十五

体力：五十

攻撃力：五十五

防御力：四十四

すばやさ：四十三

MP：四十四

コークス レベル：二十五

体力：六十五

攻撃力：四十八

防御力：四十八

すばやさ：四十八

MP：皆無

セレネー レベル：四十八

体力：二百七十九

攻撃力：二百十七

防御力：二百十

すばやさ：二百三十

MP：三百五十一

まあ元々。

この就職都市『フロイス』はぶっちゃけスタート地点の村の次の都市なわけだから。

とてもとても序盤で、スタート地点から来たのであれば、レベルもこの辺りならまだ大体十ぐらいが関の山なので、レベル二十五以上が条件、という事はまあ入学はほぼ不可能だ。

しかし、ボレアスとコークスは俺と行動を共にしていた所為でガンガンレベルアップしちゃったワケだが。

いや、それよりも俺だよ！

どうするんだよ！ このままでは俺の人生設計が！ 輝かしい未来が残念な未来へと変わってしまう！

「くそう…….ならばレベル詐称とかするしかないな…….」

と、俺はブツブツ言いながらなんとかレベル詐称についての案を練り始めるのだった。

最後に。

愛生ちゃん、お誕生日おめでとういっしょにね。また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1221x/>

しゅうかつ！～初期装備で魔王（ラスボス）を倒してしまったレベル1の就活

2011年10月28日14時09分発行